源氏系圖

へ12
利
20
1

へ12
20
48

特別
門 20
号 48

大上天皇

あまひの巻より位をゆづり給ひて末の巻より
うしろ姿をかくしつゝのれ門ありひき付よ桐帝ともあり

前坊

故院のれうしうと葵よりしうと

秋好中宮

母六条れ息所

あまひより秋宮より中宮に都へ帰り給ひ
猶合より関より末つゝのて梅つゝとりさ乙女より中宮

桃園式部宮

ようちれ法より皇后宮よりあがりを給ひ秋好ともあり

槿斎院

うを給ひ雲の巻よりしうり

服よりてありさせ給ひ桃園宮より女宮とあひて

さうをよりもの いつきよみ給ひ雲より父のれ

まゝ野めふ　ワきけよ槿とあり

三宮　院のひとりけれ腹也　摂政の北方よりもうめふ　後ごう院乃

巻よりうれ給　ワきけよ大宮とあり

女五宮　桃園宮よ住めふ　うゝ　紀ごうよう也

朱雀院　ワきけ朱

　　母弘徽殿大后

相つゞの巻よ藤宮おもひよれ位よつき給　おゝけてよ

くゝねと藤宮よ譲　よりうれ上よれゞ　おろして西山のれ

寺よすゝを給　同巻六条院れ賀れあよ　一院どゝ申れ門也

今上　　母義香殿女れ

　明石の巻よ二歳ところ也　おゝけてよ藤宮　梅ごえて

　れ元服　よりれ下よ　ねよけうを給　ワきけ今上

女一宮　よりれの上よ　一人目

落葉宮　母一条れ御息所

　よりれの下よ　柏木大納言の北方よ　なり給　後て

　夕ぎりの大将　うゝ　ひとりめふ

二条内親王　母先帝源氏宮

　よりれ上よ六条院よ　ひとりて　内下よ二条ゝ給　柏木の巻よ

　なりうこの人　ワきけよ女三

女四宮　ワれ上よ　ゝ也

春宮　母あゝの中宮

　よりうよ　むまれめ　内下よ　坊よ　なめふ

式部宮　　女院同殿宮

ゆふ宮の巻ゝ夕雲れ中ゝそして六条院の寝殿を

やすらゝ殿ゝ給ふ二の宮ところゝ　げろゝ式部

白菊部宮　　女同上

ちれ下ゝむまれ給ふ白宮の巻ゝ　ぐんぢゝ　部宮

ゝんぢ　むらさきのうへやしちゝ給ふ三の宮や　白

若君　　女宮名の中の君

やどり木は巻ゝむまれ給

常陸宮　　女更衣

白宮巻ゝ夕ぎりの大将のきゝゆきのうへ　ぢ

給ふ日　部宮ゝ宮ゝ　ゝれ　ゝ人四の宮ところゝ

中務宮　　女同殿宮

同の宮ゝ　日夕雲の大将まゐ紀ゝ　車ゝのを給

ゝゝの宮　あづまやゝ大宮の御ちゝや　ゝ時まいり給ふや

ぐりゝに上野のみこと　殿上ゝ給ふ人

一品宮　　女同殿宮

ゝれをむらさきの上やしちゝ　ゝて六条院の南の町ゝ

すゝを給ふ大将心ゝけ　ゝてまゐりゝ人

女二宮　　女藤つぼの女御

やどり木ゝ内の御ゝ　ゝて大将をむゝゝ給

女ゝりつぼの更衣

六条院

七歳ゝて源の姓ゝ給ふ　ゝ十二ゝて元服　ゝ殿ゝ中将

紅葉賀より匠三位中将如元同巻より宰相中将如元葵より大将次ぐの巻より浦より明石の巻より絵より澪より乃ち權大納言より雲隠より匂宮より紅梅より竹河より橋姫より椎本より宿木より東屋より浮舟より蜻蛉より手習より夢浮橋

大上天皇の号を云ふ

夕霧左大臣 如葵上

とりづくりより内裏宴の景色乙女より元服してあさ紀より

てくらの御子同巻の秋除目ようより絵第雀院行幸

の時伯従より玉づくりより中将薄雪より宰相中将如元薄の

うくひす行幸納言より紅梅より右大将同下に大納言より

左大将より澪ぐり白宴の巻より右大臣大将如元行幸より左大臣薄大将

薫右大将 如朱雀院女三の宴

柏木の巻より生れ給ひ白宴の巻より元服して四位の侍

従どころ也その秋右近中将寺田月巻より三位して

宰相より中将如元竹河より中納言やどりぎの二月より

拾遺より狩大納言より右大将を兼ぐ

明石中宮 如あけぼのうへ

さおひめの三月より明石の澪より生れ給ひ松風より絵より

のぼりて大井より すぐる より六条院へむかへ給ひ薄雪

のうくひすより玉宴へまいりて ちぐいちやどころ也出法

より中宴白宴の巻より皇太后宴

右衛門督　　如三条上

まうれ下よ朱雀院れ賀のさぐれ時まうてまいり
さ女系の殿ようぶえ吹とうも自家の巻よのをう
れ日出仕をしへ人ぐまうれ上ふ五つの家宇治まて紅葉
うをりし日中家のれ院うれまてまうでうふまし御
げまれまうをうう

中納言　　如殿内侍

六条院夜のれうむへてやしまれ源氏君朱雀院
のれ賀れさぐ御おすぐうき南日あよ恋と同じくまいり
のふまし院れ下ようも自家の巻よけうの日太歩る
のうしとおすぐ出仕をしへ人

右大弁　　如三条上

まうれ上家の巻よのうれ日出仕をしへ人まうぐまく
まうぐへまいりうをうも見れ下ようう恋さ
いへう

侍従宰相　　如誰とも

さまぐをとに自家のうれをまうでの時宇治へまいり
うをしへ人

源宰相中将　　如三条上

まくは歳へ廿将竹河ま三位中将同巻よ宰相中将
さまぐはもくま権中将といへう又まぐはろしの巻り
おすぐ行ってうう殿上しあといへるば人ぐうや

頭中将　女房内侍

竹河の源少将といへるやどりまゐ自家六の君をうしろめたく思ひ給へ時々ものの侍るにてまゐりたるにて

とかくへ一人椎本の中将といへる比人なるべし

四位少将　女三条上

一不家れたるやどりの時横河僧都のもとへ中家れつゝ

きし人竹川の兵衛佐といへる

童　女雅ともなる

やどりまゐ今上の女二宮女房のえんにて給し時望みき

こゝろし人ゝ〻ぞとあるべ

春宮女房　女三条上

[illegible]家の巻り[illegible]家へまゐり給

中君　女おちう

二宮のこゝろのこゝ

三の君　女房内侍

四の君　女三条上

五の君　女おちう

以上三人々ぐ〻の巻りまゐる

六の君　女房内侍

やどりまゐ自家れいこゝろ給

蛍兵部卿宮

ゆとは帥家し女まゐ第雀院の行幸の時兵部卿とこゝ

うを給へるよう〜切要よこそうち

侍従　女もとのさうのく

梅ごえよ六条院ちう〜のれつひそれ本ちうで

一人

童宮

同

ひ二人ワれてよ。牛産院のれ賀のもづくよ方嚴樂

まいのふ

宮れ京　女ま紀ぢ〜死のう人

文うも給て後女ぢよりて。探察大納言のもとに

すこ給白兵戸つ文ようぢるずらづ給一人

四の宮　女菊香殿女れ

もみぢのぢにぢくふりて秋風未まひまひ一人

仲宮

かうる六条院の馬場のおとづれそおよれ兵戸の家よ

くくひとりてくしのひ一人

八の宮　女大臣女

宇治ようちう給ようー梅姫のま紀よくちうぢくく乃

家どドてさわき付八

紙角大宮　女大臣女　あげま紀の巻ようも給わさは大

中宮　女おちぢ

あげま紀よ巻つ家よあひて早蕨よ二条院へむ人

られのふ口き付中

浮舟　母ひろちがつまれこうされる

やどりまよひこちちのぼりて東屋よ宇治よりつ

よちるこれよ小野よりこう沼口き付侍

式部つ宮

あづまやの巻よむすめ夏ゑ侍ら大将よりこうこうし人

げろうの巻ようきゆくるこうし侍ら大将のなぐといつ

侍従

母りこのこうるのる

宮ゑ

母おちど

ゑうきゆてのちあしれ一品のこゆへまいるゑ結

ゆるゑ大将こうこうけしし人

冷泉院

母うして雲の女院

あるひよ雲ゑこおげろうよれこくね見れてよ行ゑね

絡十の所おとやこうき付冷

一の宮

母ひげぐろの大臣女

むまれ絡ふ行河よこうゑ

女一宮

母落仕大臣女

一のこやこるきあね

女二宮

母一ゑよちるど

行河よ生れ絡れを一の女性婿やし

一品の宮

母朱雀院よおちるど

女一のこやちり一品のこう見れ上こうゑ

女二宮

前斎院

あつまるものいたきまゝ給ひて院のれいぐまうち
てありさせ給ふ女三宮とあり

先帝

式乃宮

もゝめハ若うつくしき女にて式乃宮ともゝ

薄雲女院

后ぐらゐの宮の宮たち
きりつぼ院へさつり給ふ。紅葉賀
藤壺女院をそなへ給ふ。
きりおほきゝ給ふ大上天皇はなぞゝふるふ

源氏宮

ゝ女ゝを給ふ。うすくもの巻よりくれのゝ
毋更衣

朱雀院藤壺女院時ゝまいりのぼり。女三宮をう給ふ。
つぎとそゝしきうを給ふ。ゝ

源中納言

つぎゝ女ゝ。右兵衛督。梅ぢえ。六条院ゝ内うしゝを
給ふ。人ゝれ下ゝ中納言ごろも
若君　朱雀院れ賀ぐくの日。宮廉まひ。人

中将

侍従

民乃大輔

此三人いとうられ給大将の御ある星うるれし時父のもと
うつむくまいりし人
髭黒大将宮　母今の御方
大将ひらられしいりけし人
紫上　母按察大納言女
十ぐるまの時源氏の君むくらう給ぬのうしろにて車
をゆるされ法ようられのふ
冷泉院女れ　母髭黒の御方
とうぐんを入内おげうしまの中の君ひりられどもむ
されのうしろいもうらくうを
常陸宮

阿闍梨　私云和名の巻ゴ醍醐の阿闍梨
源氏のれ八侍ようまいりてくたいもうられのもくうて
あるとき所かうしー人
蓬生君　蓬生の巻ゴ源氏の君ゴあひ蓬生
ひんぐのおんようけうひのふ　ワキ付末つむ
摂政太政大臣
ちちつぐようさ大臣にて源氏の君の加冠をしー人ゴうう
まの巻ゴ政仕されげうしゴ太政大臣にて摂政しゴ
うゴ雲の御月ようを給ワキ付左大臣
政仕太政大臣――母三宮――ワキ付左大臣
ちちつぐゴ義人廿将ちうぐにゴ中将紅葉賀ゴ西宮

位下、次ぎ宰相の中将、おづうしの権中納言、内雲
の権大納言、左近大将を兼ぬ、どうの内大臣、花乃
うへ、太政大臣、ちかれ下る、殿仕の表、そまつのふ
うやのくるうしのふうやの巻、ようもわきはれ
左中弁

ちかうこそ、小山へ源氏のれむ人、ようしう一人、芸の
えんの中将、弁ちかぐまいりあのそこいるもの、人多
べーダぐの巻の義人弁をこそ人うや

藤大納言

春宮大夫

ぴ二人へ源氏三条のうやへ、ちかうこそ、殿仕のおと

ごひきつれうまいりたし人やがばうれ、左近とあり、
とうえんの左衛門督、権中納言どうさうもふをこの人ぐ乃
殿上人

右衛門督ちかぐべー

毋三の宮

あつひの巻、夕ぐれの雲、どうこそうさうも活

柏木権大納言　毋二条太政大臣女宮君

九条の左近少将、左近の中将、ふ、の中将、ふ
上、宰相左衛門督、内下る権中納言、柏木巻、ようぐの日
ふ、権大納言、ちかうて、ほどれくうをあふ

紅梅右大臣　毋内上

けうまるわ、ふて、顔ぐ、まけ、日ぬうえ、こう

ひし人ゝおぼへしに元服・神音に弁少将・ふたゝび上に以弁・た
あれ下に左大弁・柏木に大納言かぎりありし時・一条の家
の御息所をかくしすぐむしに冷泉院へまゐりしもこの
人なるべし・紅梅に按察大納言と云・竹河に夜大納言・左
大将かけるの右大臣に成給とみへり・文推が本に白家の御閲
まうでの御むすめ人はまゐりし夜大納言もこの人成べし・やがて
まあつまやにいりて・按察大納言とみへる不審

大夫

紅梅にけふはまで宮つの家へ・いまうとも君のあ君給し人

麗景殿女御　母故北方

紅梅に東の家へまゐり給

中君　母おなじ

左衛門督

床夜に夜御従とみへるは・此人かや

藤宰相

あれ下まつとのまつちの人さこし人は・二人ともゆかりれお
ぞの六君は宮つ家かなひそめ給し或三夜かふれし
人や鈴虫に六条院になるかいて・冷泉院にまいりしも此人かや

頭中将

蔵人少将

此二人幻の巻に・夕ぎりの君ふちわかは夜上しめへる時おの
が上かりし人は・をぢの夜がしとみへり・文夕ぎりの大将・一

条家よりひきとりて、ぶけ侍をつかひて、ちくたくぐ
衰ごろひうめ〜ときくごの給ふ、ぶけをとりまサ納言兵
衛の佐、伯耆大夫ど伯ちーも、つれまちれ叫、兵衛佐大夫
ときつくるもこれ人ぐちるべー

八郎君

まれぐーくるよ、浦帯の時らくふてあちー人数のうぐ
の仏者よ、紫王恩まひーもこれ表ちるべー

玉鬘尚侍　母夕ぐりのうへ人

四のらータぐりのうへのめれどよぐてけらーへぐるも、年、
つて、むぐーの巻よ、系へのぼる、数ぐ毎よ、内侍、様相よ、
ひげぐちのかのくるるちめふ

弘徽殿女御　母同柏木

ここれぐーよ、十二よて内へまいりめふ

夕霧大臣室　母掃察大納言の今の少方

雲ゐのうりーくちずくひーし人　ワキ付雲ゐ

近江君　母祖さもうくちれてピー人

●二条大政大臣　ワキ付大臣

朱雀院れ母方の祖父くぐめ太大臣、明石よ太政大臣ようをの人　編

藤大納言

頭弁　くくまよ白虹日代つくめけーく浦をー人

麗京殿女御　朱雀院れらるれ叫のれ、さらにこ

四位少将　ちくぬぐ花のえんを結ーめち、源氏のれ、人よ

まいりて、ゑしゝるべての女ちゝとよつゝへ人へ

尼中納言　此二人は源氏ぬぎゝる月夜の物がたりまゐらせて、

ふのぢんのゝ子ゝ人へとつけてこゝを語り給ひ、弘徽殿ゝ

出給へのれをゝちをゝ人ぐ世やゝ、ゝ年の冬ゝ中将家乃

ゝをけるぐゝつくゝをゝれ人ぐ世や

弘徽殿大后　わゝさ付弘徽殿又は麗殿

東雀院のれ母、あつひゝ皇太后ゝうを語めゝ申ゝれ上ゝゝゝ

宮仲宮小方　ゑのゝえんの寒ゝゝゝ

按仕大尼宮　四の志どゝゝゝゝゝゝ

五の君　ゑのゝえんゝゝゝゝゝゝ

朧月夜尚侍　わゝさ付朧月　あつひゝ東雀院ゝゝあつて、ゝゝゝけ殿と

ゝゝ四、ゝゝ年ゝ内侍、ゝゝ下に尼ゝゝゝ、六の志といゝゝ

尼大尼

女御　冷泉院れゝゝゝの時の女れ、ゝ記ゝ所ゝゝ

こゆゝゝゝゝ信任ゝつゝゝれゝ大尼、ゝれ人ゝゝゝ

尼大尼　梅ぐゑゝゝ大尼、ゝゝれ上のゝ人ゝゝゝ

大蔵卿

修理大夫　此二人、女れひゝれれゝゝゝは、ゝゝ

数壺女れ　今上ゝ家のれ時ゝゝゝまいり給ゝ、ゝ中

ゝゝれ給ゝ、女二家ゝゝゝゝゝゝゝゝ

給ゝゝゝゝゝゝゝゝ、梅ぐゑゝ麗京殿ゝゝゝ

ゝ三志れ人ゝゝ

●左大臣　行幸と大臣と号して

女　夕ぐれ　れ子　宰相の中将　ら〜人の中将　ここ

〜時　ひろ　の　ひ

●右大臣　今上の　祖父　〜よ　右大臣　ら　る

蝙蝠黒太政大臣

こてふよ　大将　ら　上　よ　花　よ　物　で　内　下　よ　右大臣　て

さ　大将　を　辞　て　新帝　れ　れ　う　〜　ら　こ　て　〜　右　太政大臣

ち　ら　〜　行幸　よ　う　ら　ち　わ　き　ま　ひ　ま

頭中将

源氏の大将　ここ　て　〜　時　内侍　の　つ　ま　ら　ち　出　ら　し

あ　ひ　き　る　て　ま　ら　れ　り　て　こ　て　こ　て　ま　ち　し　人

弘徽殿女御　朱雀院の女御　今上　の　れ　母　ち　ち　う　を　う　ま　人　ふ

〜　ら　れ　の　下　ま　る

薬中納言

女御　或　て　女　女

桜　桜　る　十　り　て　て　ど　〜　ら　行　ば　の　正　月　1　内　母　の　内侍

の　浮　へ　ま　う　で　ら　〜　人　や　ら　ち　に　桜　の　え　ん　の　日　ま　ひ　〜　ど　ま

次郎君　女　か　ち　で

ま　れ　で　〜　ら　ま　八　で　ら　て　〜　れ　ま　ま　に　う　べ　ま　ま　ら　〜　の

の　ま　〜　人　ま　ら　そ　の　ら　昇　進　ま　で　ま　ら　で　で

右兵衛佐

女　玉　う　で　〜　の　う　人

ま　ら　れ　下　よ　女　系　の　時　ま　や　う　の　ま　え　吹　か　ま　又　朱雀院　れ　が　天　乃

日　陵王　ま　ひ　〜　人　行　で　ま　ら　左近中将　ど　ま　ま　内　巻　よ　右　近　衛　朱

給うて、姫系等ちかいつくり、やごちまく、後のえんの日、
まうのぼりたまひしに、人ちかくべ
右大弁　　母おもと
ひ二人むすめ、六条院よりわれてまうれしに、時
ぐてまつり給ふ、又東雅院れ、雲のもぐれ日おもと、尚
日にまつり給ふ、行ぶよ太中弁、月卷よ太大弁
頭中将　　母おもと
行ぶよ侍従、月卷よ中将
真木柱上　　母中納言よ月
ちかれ下よ、蜜の若ア、宮の小方よちかうやうを給ふ、
後紅梅大臣、按察大納言とこえて、時小方よ
まれのうら、我をもすちかくまれおしうう人
女れ　　母むすめの内侍
行ぶの四月よ冷泉院へまつり給ふ、ゆのれ子、宰相中将
義人サ将ところ、時心つく給人
尚侍　　母女れよおもと
行ぶよ母のゆづりをうけて内侍ちかやぐ内へまつりあふ
●大臣
六条れ皇女　十六まて前坊へまつり給ふ、秋好中宮をうめり。
十九まてこやまとれ給ふ、ひすあれ秋宮よ、
行幸よちかぐ、ちかげ、しのゆりて、行ちかうを給ふ
●大臣――女御　六条の八宮のれ母

●大臣　ひめ君二人うしなひてうれ給由をうしひまうし

「内侍宮小方」

「常陸宮小方」　たゝ也こゝろぞ

「宮治家の小方のめいぶとい中将君どて家よりうしひさ小方

を給て後ゝ殿の君をうめり後は考慮よりてゆだあまりきき

●大臣

「入道播磨守」　近衛中将ちかけう語りて播磨守よりて

「国まてゝ」　国にくだりしこゝろ

源山ゐをめ

「明石上」　舟中務親王のむまご

松風より海でまうれて大井に住ゝ上女より六条院よりうちて冬の

れうこゝろ

●按察大納云

「雲林院律師」

「桐壺更衣」

源氏の君をうこゝ結て三らせといふよりるゝるゝめざりて

まで仏の時輦をゆうさろ島色やようつす板三位をくろ

●按察大納云——紫上母

●按察大納云——五節君　上女より舞姫よりて やどさ

ゝひさゆうげゝのむすめらあり

●大将　東宮より五大将といふ　左近衛中将　ひろれをけづむこ

●權中納言　右衛門督うけたまはる

左衛門佐　源氏中将のさぶらひ人の所童にてゐ〜ふぶちるいもう

弟男よりてひろちへぐちをさやにのぼうつをミれ出おらうや

空蟬君

父中納言うせて後いつれをけがつまゝるゝ又ひろちるかゝ

ぐちゝ所ぐてくちをさやゝ京へのぐりて内裏ゝはけゝ

とられて後尼ゝまりて二条院の東のおんゝすこさ

●右衛門督一女　母をの尼　中将ちゝ人のゝ方

うせにゝてゝるゝひゝまゝ

●參議宮内卿一明石乳母　母院宣旨

源氏ゝゝひゝりて明石へぐゝ姫松風ゝ姫君ゝて姫へのゝりゝめ

三位中将

夕顔上　後仕のちぐ義人の女将ゝさてゝしけゝゝひて玉

ぐゝをうめゝを後夕ぐゝのやどゝて源氏ゝあひゝゝよぐゝ

の院とゝやゝて出れゝらゝれゝあうゝもあゝゝ十九

宰相一宰相君　玉ぐゝれ出れ女房六条院ゝすこ落ゝ

參議藤原惟光　人ぐ代をゝ紀ゝ人行ぼゝ薫ゝ言ゝみけゝもけ人ゝゝ

母大弐乳母

兵衛尉　童ゝて出ぐをゝ

文化ゝゝ活ゝれつゝれゝ梅ゝえゝ兵衛尉みざゝゝ

うぐまれゝゝゝ和ゝてまいりゝ人

侍典侍

女蔵の弾正・夕霧れなどの心べ召れ下る間侍伝とこゝ

山阿闍梨

惟光があにと夕ぐれまことゝ

女将令婦

夕ぐれの巻まこゝ

三河守妻

夕ぐれ・大武のあまれるやうはあり

前播磨守

源良清

女紫・蔵人うてうゝ侍あゝまみ納言

どこゝ・おいぐゝ・穀員伝・山女・太中弁・近江守を兼ね

女節

山女の巻まこゝ・やそまゝふゝこゝ

左中弁

宇治の家の小方ゆゝのをぢとゝ

弁尼

女柏木のめれと

女三宮の侍従のめれとのめいゝ・ゆゝ大将・音のまゝ

そ一人・面々ゝゝ・ゝゝびまこゝ

伊与守

さゝめ・伊与まよぐちびさちに・ゆてきやまのぶゝ・月巻・ようをめ

紀伊守

源氏れかゝゝぐゝの中ばの家あゝど・をさやま河内

守まゝ・よどもありとはゝゝさぐまこゝゆゝ

蔵人太近将監

源氏のた将まて・秋院のれ・禊まつゝゝもつゝ

治一・吋一・矣ゝゝゝ一人ゝ・大将・次・广のゝゝにともむ

ゝ治一・ゝ・矣どのれゝ・ぶけづれ・ゝゝのぶゝて・ゆげい

のぶゝまゝ・松ゝぶまゝ・ゝゝ・ゝゝまゝゝ

蔵人・将妻

うつきこの巻のまゝむすめ・源氏うつをこのもめけの巻あハ

なて彩ぎれ義をむすびぎるとそ云けりうちし人

●常陸介　もというちのうにのうこ後よひうちうあう

義人式ア蕙　母まへのつまうそう文へまいうし人

義人太近将監　母いま小のうるう

後の大将音のゆちうて義人よりして我方れ将監よりあう

童　母おうし

母の子のよりとうさて後れ文ゆきそけいされし人

源サ納言妻　母まへのつま

讃岐守妻　母おうど

サ将小方　母今ぶのうる

●太宰大貳

源氏次ア　よおりうちうむうろけうしうちうのぼううて者づれ

そまうらし人

筑前守　ちれつひうて次ア へまいうし人

五節

源氏あひこ結し人るう父うて次ア れ巻う京うのか

ア又明石巻ゆとうめれ巻にも者づれのうとうあ

●太宰サ貳　タうのうへのうれうれおとこ

豊後介

父ううて後ぶうづうれ者紙うてのぼう六条院へワうあ

次郎
三郎
揚名介妻
姉君
兵衛君
兵衛太輔
大輔命婦

ある時、それなりの家司まうけてまさ
は二人はけうしてまめきりけて京へものがたり
タがゝの巻まうもの
これもいとうまあるとつきてのがたり
まくいあてごとくいひさぼむよごてのがたり
ほうんぐ伊ちどいとりうまく
如左清門の乳母
もゝつむ〻、表の夏源氏ゴトリさうもう人